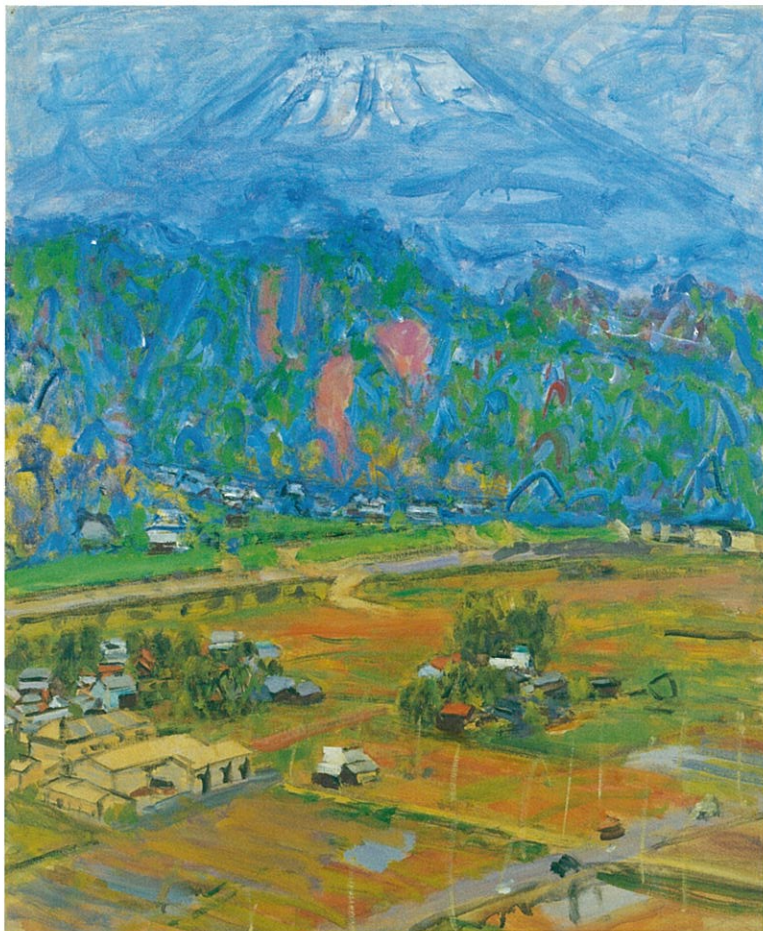


宮本三郎と風景

2006年12月2日 土 — 2007年3月25日 日



〈風景／富岳と山村〉1962（昭和37）年頃

生涯を通じて人物を描き貫いた宮本三郎ですが、時にアトリエを飛び出し、自然の風物に向き合いながら描いた作品も残っています。それらには、アトリエという室内空間とは異なる、光と空気の表現を読み取ることができます。

絵画史上において、〈風景画〉が開いたのは17世紀ごろのオランダであったといわれます。眼前に広がる自然を、画家が感じた印象の象徴＝〈風景〉として一つの画面に切り取る眼差しは、西洋画が日本にもたらされると同時に、日本人画家の意識にも定着していきました。またそれは、一人の画家として歩み始めた宮本にも例外なく宿ったのでした。

「風景に向って誰でもが抱く感動の中に、まず自然のもつ無限のひろがり、無限の遠さというものに対する驚きがありましょう。絵画に於いてもこの人間最初の感動であり、風景の本質であるものが、風景画の構造の基本条件となって来たように思えます。」（『技法 空間の表現 風景画』美術手帖106 1956年3月号）

こう述べる宮本の、その画業を通観してみると、初期から晩年に至るまでの間に、多くの〈風景画〉を残していたことがわかります。

1930年代の初期作品では、師と仰いだ安井曾太郎への強い感化を想起させる「赤松と溪流」（1935年）、戦時中には従軍先での風景スケッチ、そして戦後間もない頃には、疎開先の故郷石川県の風景を残しています。また、戦前・戦後の二度にわたりヨーロッパへ赴いた際には、コロヤやクールベ、モネといった、様々な画家が主題とした風景に臨んでいます。そして、1960年代から晩年にかけては、富士山や箱根、熱海などに取材した作品がみられます。とくに歳末から新年にかけての箱根での制作は、十年余も続きました。

1960年前後の「流水」のシリーズには、当時国内に押し寄せる抽象画の波に揉まれる中、独自の具象表現を追求し、苦闘した宮本の姿が浮かび上がります。水の紋様という具体的なモチーフを、非具象的なパターンで捉えようとした一連の作品群は、後年、「何度掘り返してみても、自分は

レアリストだった」と語った宮本が直面した、自らのレアリズムと時代との相克を物語っています。

無類の素描家であり、卓越した描写力を持っていた宮本が、国内外の様々な〈風景〉に向き合い、どのように表現したか。本展では、油彩の風景作品を中心に、十数点の板絵の作品も併せて展覧します。それぞれの作品からは宮本が置かれていた時代性が感じられるとともに、〈風景画〉という視点から、宮本が生涯を通じて追求したレアリズム観をたどりたいと思います。



〈郊外の町〉1939（昭和14）年



〈赤松と溪流〉1935（昭和10）年頃



〈盛夏山湖〉1963（昭和38）年